

奈良県における



平和の継承活動

～ならコープ平和ライブラリーを拠点として～



2022年5月21日(土)

継承する会10周年記念シンポジウムⅢ



平和ライブラリー



SUSTAINABLE
DEVELOPMENT
GOALS

2030年に向けて
世界が合意した
「持続可能な開発目標」です

16 平和と公正を
すべての人に



2018年 ピースかふえ 「被爆者運動に学び次世代につなぐ」



ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会 栗原淑江さん

ならコープ平和ライブラリー 開設記念講演会

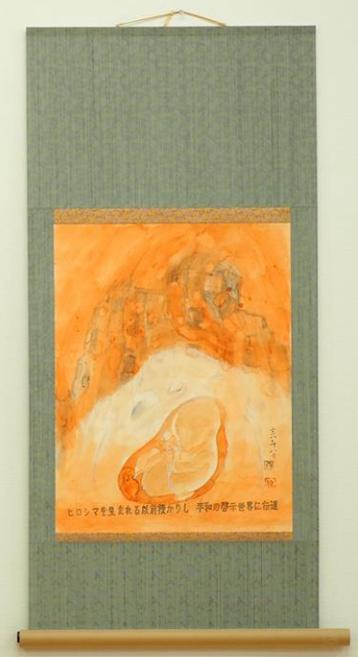


ならコープ 平和ライブラリー

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS 16 平和と正義
被爆・戦争体験を継承します

ならコープ 平和の活動

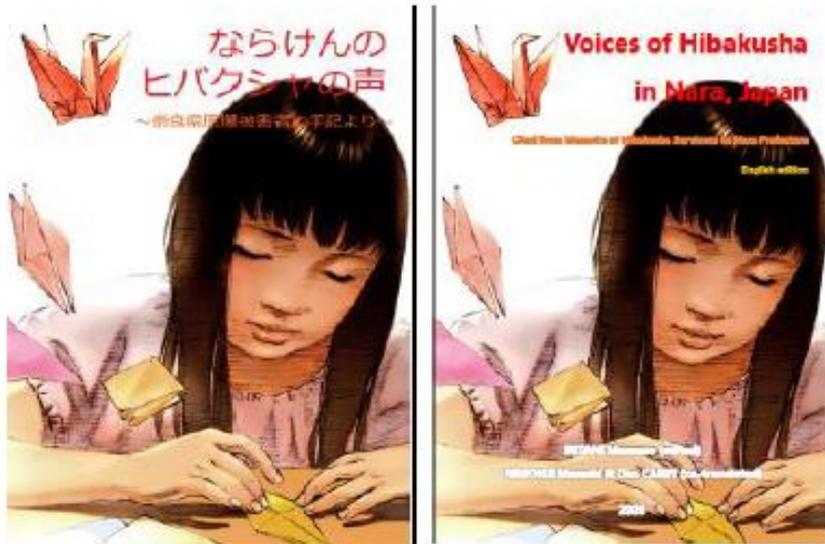
- ①被爆・戦争体験者と継承者をつなぎ
学びあい交流する活動をすすめます
- ②奈良県内に散在している被爆・戦争体験を
収集・記録し将来へ継承していくための拠点とします



平和ライブラリーの 資料整理



第10回国際平和博物館会議 出展



~ Nara Co-op Heiwa Library for Peace ~
 ("Heiwa" means "peace" in Japanese)
From Nara, in search of peace !



ならこーお

"Citizens' Co-operative Nara Co-op's peace activities"



Since its establishment in 1974, Nara Co-op has been promoting various projects and activities with the understanding and cooperation of its members "for peace and a better life". In this context, we are working to pass on the experience of the atomic bomb victims and war to the future generations with peace as our theme. In particular, the center is dedicated to listening, learning, talking to each other, fellowship, and broadening the circle of relationships for peace which we cherish.



Recording and Passing on the atomic bomb victims and war experience at the Nara Co-op Heiwa Library

"Nara Co-op Heiwa Library Opening Lecture"

On Sunday, October 6, 2019, we held a lecture to celebrate the opening of Heiwa Library "Towards Nuclear Abolition". This event was held under the theme of "Learning about the atomic bomb experience and passing it on to the next generation".



Nara Co-op Heiwa Library was established in October 2019. "Heiwa" means "peace" in Japanese. This place has existed as a base of activity, to record the dropping of atomic bombs on Hiroshima and Nagasaki, and memories of the war in Nara Prefecture. We will devote ourselves to pass on these painful experiences to future generations. And we will be sure that it makes for the accomplishment of peace.

声明

ロシアによるウクライナへの 軍事侵攻に抗議し、即時中止を求めます

ロシアによるウクライナへの軍事侵攻が開始され、尊い人命が奪われています。これまで国連安全保障理事会や外交協議が精力的におこなわれてきたにも関わらず軍事侵攻に踏み切ったことは国際社会の平和を脅かす非人道的な行為であり断固容認できません。

日本は、恒久平和と戦争放棄をうたう憲法を持ち、世界で唯一の戦争被爆国です。私たちはこの国の国民であるという確かな自覚にもとづき、軍事力の行使による真の平和などありえないことを強く訴えます。

私たちならコープは創立以来大切にしてきた平和の理念「よりよい生活は平和であってこそ実現する」をもとに、文化と歴史をたいせつにし、「子どもたちに平和な未来を」と平和の取り組みを組合員とともにすすめています。平和なくらしを脅かす軍事侵攻は何も解決できないことは明らかです。過去の歴史から学び、誰も望んでいません。

ロシアによるウクライナへの軍事侵攻を直ちに中止し、外交による平和的手段で解決することを強く求めます。

2022年2月25日

市民生活協同組合ならコープ 理事会

ロシアによるウクライナへの軍事侵攻に抗議し、即時中止を求める声明

ウクライナ緊急募金

ご協力をお願いします



首都キエフで、破壊されたアパートの前に立つ女の子。(2022年2月25日撮影)

ウクライナでは今、750万人の子どもたちの命と生活が差し迫った脅威にさらされています。コンタクト・ライン（接触線）周辺で発生している重火器による戦闘は、すでに重要な給水インフラや教育施設に被害を与えています。今後何万もの家族が避難を強いられる可能性があり、人道支援のニーズが劇的に高まっています。危機下にあるウクライナの子どもたちやその家族に支援を届けるため、ならコープでは「ウクライナ緊急募金」を行います。組合員のみならずご協力をお願いします。



ウクライナの国境近くに設置されたモルドバの難民センターへ、4トンのユニセフの支援物資が届けられました(2022年2月26日撮影)



<募金方法>



★店舗

専用募金箱をサービスコーナーに設置しています。

受付期間：3/17(木)～5/31(火)まで

★【無店舗】OCR注文用紙

| ユニセフ ウクライナ緊急募金 | 募金番号 |
|----------------|--------|
| 1口= 100円 | 151858 |
| 1口=1,000円 | 151866 |

4月1回企画～5月3回企画 OCR注文書または、eフレンズ受付まで
《3月28日(月)～5月14日(土)》

★5月31日(火)までに寄せられた募金は、日本ユニセフ協会「ウクライナ緊急募金」へ全額寄付します。ウクライナ国内とその周辺国へ避難した子どもと家族のための支援に充てられます。

★ならコープで受付した募金については、所得税の寄付金控除の対象とはなりません。あらかじめご了承くださいませよう、よろしくお願ひします。



問合せ 組織部 0742(45)7884



被爆者の足跡

被団協関連文書の歴史的な研究から



ふたたび被爆者を くらないために

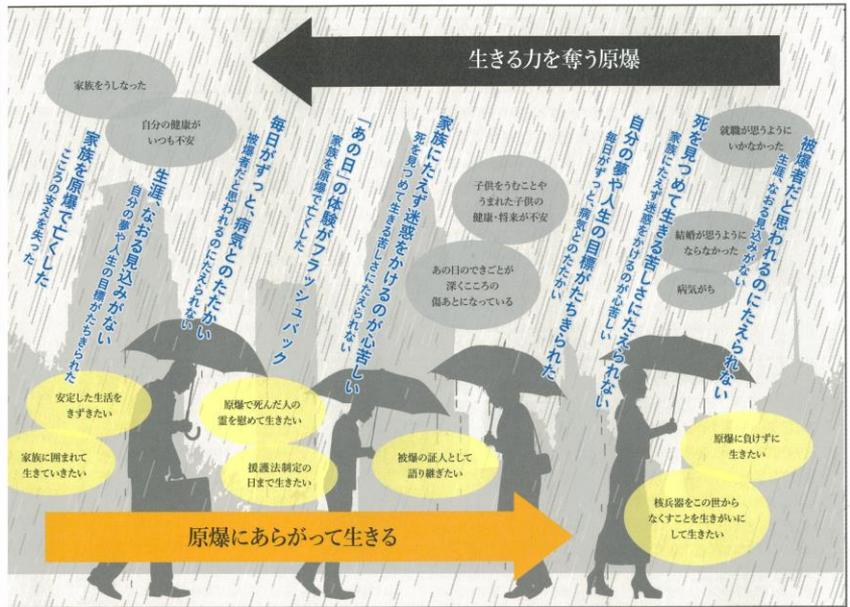


世界へ広がる



被爆体験を背負って生きてきた被爆者

からだ「くらし」「こころ」全面に及ぶ原爆被害は、被爆者たちから生きる意欲を奪う力として働き、なかには自殺に追い込ま人もいました。そして被爆したことによる深い傷跡は現在に至るまでの長きにわたって、被爆者の人生の節目で重くのしかか被爆者たちに辛い経験を強いました。被爆した事実を消すことはできません。原爆の力に押し流されないために、被爆者はかの「生きる支え」をもち、原爆にあらがいつつ生きて来なければなりません。原爆を根底から否定すること、つまり「たちのような人生を強いられる人間を二度とつくりたくないこと=ノーモア・ヒバクシャの実現」は、決して譲ることの出来ない、最者の叫びなのだといえます。



※上の図では、1985年に日本被団協がおこなった原爆被害者調査の結果やインタビューした被爆者の証言をもとに、被爆者の心の動きをまとめた。主要参考文献として、濱谷正晴「原爆体験」(岩波書店 2005年)、石田忠「原爆と人間―被爆者援護法とは何か」(ノーモア・ヒバクシャ9月号 2011年)を用いています。

ワンポイントトーク

POINT 10 語る被爆者／語らない被爆者

私たちが「あの日」の光景を知る手かりは、被爆者の証言にあります。しかし、壮絶な体験をした被爆者のなかで「語らない」選択を取る被爆者がいることも事実です。調査史料に残される「答えられません」の文字からは、人間が人間らしくいらなかった原爆被害の実情をより深く捉えることができます。被害の実情を研究する際、語る被爆者だけでなく、語らない被爆者の存在にも目を向けることが大切です。(日高彩貴)

POINT 11 被爆者の中で常に揺れ動く2つの心とは

一人一人の被爆者のなかには、被爆者の生きる意欲を失わせる方向へと働く原爆の力と、それに抗い、生きがいを持って生きていこうとする被爆者の力がつばぜり合いのように拮抗して存在しています。被爆者は「からのたの傷は消えない。亡くなったあの人は戻らない。次に死ぬのは自分ではないか...でも、頑張ってみよう。」と、揺れ動く心を抱えて生きてきました。(吉村知寿)

次の頁では、若佐幹三さんの被爆体験をみていきます。▶▶▶

子どもたちが学び、子どもたちが描いた被爆証言紙芝居

戦いはまだ終わらない

「被爆体験編」17場面 & 「戦後・被爆者運動編」9場面

1988年、金沢市立十一屋小学校6年1組・金森学級は、一人の被爆者から5時間にわたって被爆証言を聞き取り、それを紙芝居で表現するという学習を展開しました。その被爆者の名前は岩佐幹三さん、当時の石川県原爆被災者友の会会長であり、日本の被爆者運動をリードしてこられた方です。

子どもたちの描いた紙芝居が、30年の時を経て、再び動き始めました。広島、長崎原爆被害の惨劇を次代へ継承したいという切実な願いを背負って。



証言者 岩佐 幹三（日本被団協顧問、石川県原爆被災者友の会初代会長）

文・絵 1988年度 金沢市立十一屋小学校 6年1組（金森学級）

再構成 「平和の子ら」委員会

石川県「平和の子ら委員会」作成の紙芝居

最後に



16 平和と公正を
すべての人に



平和とは初めからあるものではなく、
築くものである

